



平成 26 年 10 月 1 日 発行 第 16 号

目次

巻頭言	
京都・やきもの倶楽部を思う	
市川 博一	1
陶芸家のひとりごと	
選択と縁 (えん)	
松谷 文生	2
陶芸道中いざ凝り気	
やきものと人との出会い	
宮崎 正制	3
私の作品自慢	
創作の道しるべ	
寺西 健二	6
陶芸技術ノート	
粘土板で立体を作る - タタラ造り -	
森田 隆司	7
展覧会見聞録	
ケルンでの展覧会を終えて	
今井 真正	11
活動報告	14
会員便り	14
編集後記	15
投稿のしおり	16

編集委員会
委員長 森田 隆司
委員 片岡 俊彦
稲垣 薫

巻頭言

京都・やきもの倶楽部を思う

理事 市川 博一

清水焼団地で開催されていたアマコンが縁でできた、この「京都・やきもの倶楽部」も、発足して早くも7年になりました。毎年講評会や見学会、ワークショップなどが開催され、会員相互の親交も深まってまいりました。私も皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。

発足当初は、この倶楽部がどのような方向に進めばいいのか手探り状態でしたが、様々な取り組みを通して倶楽部の性格も形作られてまいりました。会員の皆さんの求めるものが年々高まり、企画もより内容のあるものが求められてきています。昨年は初めての会員展を開催するまでになり、会員の皆さんの積極的な取り組みによって展覧会が充実したものになりました。今年は「清水焼の郷会館」で開催が予定されています。昨年よりさらにレベルアップした作品が集まることを期待しています。

この倶楽部の目的は、会員相互の交流とやきものに対する理解を深めること、各自の技術向上などにあります。展覧会を開催し、展覧会を目指して切磋琢磨することは、この目的を達成するのに大変有意義です。その一方で、会員の皆さん全員が展覧会に参加できるわけではなく、中には全くご自身では陶芸をされない方もおられます。そういう方たちにとっても、この倶楽部が楽しく居心地の良い場所であってほしいと思います。

今後、この倶楽部がどのような方向に進むのか。様々な企画が提案され、試行錯誤しながらより有意義な活動に結び付くよう願っています。

陶芸家のひとりごと

選択と縁（えん）

陶芸家 松谷 文生

これまでいろいろな作品制作をさせて頂いてきて、「やきもの」の途方もない世界の広がりを感じ、またその中で様々な作家、評論家の方々や原料生産に携わる方々とお話をさせて頂く機会も多くなりました。その都度いつものことながら勉強熱に駆られております。そんなこともあってか、ある程度地元を客観的にみる感覚が養われていったような気がします。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、私は生まれた家が砥部焼の食器をメインに生産するところでしたので、磁器が粘土からつくられ、納品される場面を横目で見ながら育ってきました。愛媛県、砥部という地域は、戦後起きた民芸運動が基本にあり、四国という土地柄、あまり他の地域と交流を持たない環境にありました。瀬戸内海が本州、九州とを隔てるひとつの壁になっていました。



砥部という地域は瀬戸内海の壁によって本州、九州と隔てられ、そこで作られるやきものは独自の発展を遂げた。

当然、「やきもの」に関しても情報が限られており、愛媛県では他地域の現在の作家の作品展示を見る機会もなかなかありませんし、認知度はかなり低いようです。たまにそういう展示が来ても当然リアクションは少々低く、人影もまばらとい

う状況です。このような事情で、砥部焼は他地域の磁器産地には見られない、ある意味ガラパゴスの発展をした珍しい焼き物ともいえます。

実は、砥部焼において代表的な、白磁に濃い呉須の唐草模様が入った器というのは、何百年も前から伝わる伝統模様ではありません。たまに、江戸時代辺りからの様式と記憶されておられる方にお会いしますが、その都度「いえ、あれは戦後のスタイルです。」と説明すると、よく驚かれます。現在では、実際に唐草模様をメインに仕事をしている窯元は数えるほどで、他の窯元は磁器ベースで独自の展開を見せている、といった表現が合っているように思います。



現在の砥部焼の展開（一部）

砥部焼きには不思議さを感じるがあります。やはり愛媛の県民性と、古くから茶陶文化が盛んでもなかったお国柄だからでしょうか、同じような模様でも本州地域のものと比較すると、「のどかさ」があるような気がします。砥部焼を決して悪い意味で申し上げているわけではありません。敢えていえば、磁器という素材に対して、このような捉え方があると理解して頂ければ幸いです。

そんな中で、私は今の作品の制作スタイルもありまして、砥部の土は使わず（正確には今の制作スタイルには使えなかったのですが）、作品を制作させて頂いております。

「この土はこう使われてきたのだから、このように扱う、この釉薬は……。」といった感じから少しずつ踏み出した考え方をするようになってから、逆に、地方にあるやきもの産地の考え方や捉え方を次第に理解できるようになってきました。古くからあるものを、偏った見方ではなく、まず素直に捉えることが以前より出来はじめたような

気がするのです。何故なら、その地域の中で当時限られた流通と情報の中から人々の精一杯の努力の積み重ねで、様々な変化に富んだ「やきもの」が生まれているという、当たり前的事実に気付いたからです。

おかしな言い方で戸惑う方もいらっしゃるでしょうが、地元の伝統産業から全く違うスタイルを選択しながら、逆説的に上記の事を改めて感じ取って今に至っている気がする自分の仕事の在り様に、砥部焼きとは切っても切れない「縁」という不思議な感覚を覚えています。

本当に「ひとりごと」になっておりますがどうかご容赦下さい。そんなことを意識の傍らに置いて制作していたのか、こんな作品が出来ています。



昨年 12 月に制作した作品

まだまだこれから、当然よりよい作品を発表しなければならぬ上で、どんな作品を制作すべきか、ほんの少しでも土にその「選択と縁」を混ぜて臨みたいと思うこの頃です。

陶芸道中いざ凝り気

やきもの与人との出会い

会員 宮崎 正制

やきものと出会ったのは 52 歳、まだ現役サラリーマンで化学の研究に従事していた頃である。

当時は一線の研究からは退いていたが、元は主に染色に使う薬剤の研究屋で染色にも愛着があり、趣味として手描き染めをしていた。一着染めるのにひと月以上かかっていた。この永い研究生活の習性がやきものにも影響を及ぼしている。

1991 年春に宇治市志津川の桜に見とれて車から降りたら目の前に陶芸教室があった。トイレを借りに入ったら、数人の人が雑談をされて居り、話に加わってその場で入門した。陶芸の先生が驚いて「取りあえず少し体験してから」と言われたが、僕は茶碗の絵が気に入っており、これなら簡単に描けると思っていた。それから、休日には陶芸教室に通い、茶碗や湯飲みを作っていた。数年が過ぎた頃にゴルフコンペでホールインワンをした。お祝いを貰うのではなく、皆に記念品をあげるのが習慣で名前入りのやきもの小鉢をあげることにした。対象者数が多いのでホールインワン保険で轆轤を買って自宅で毎夜作成に励んだ。

この小鉢が意外に好評で高島屋に出入りの業者の方が高島屋の催しに推挙して頂き、何も解らないままに作品を 2 個持って行ったら、審査会場で驚いた。偶然、面白いものを作っているとの評価を得て合格になった。ところが、販売するので 30 個は必要と聞いて即座に辞退した。数日後どうしても出品して欲しいから友達と共同で良いから出店して下さいとの要請があり、教室の先輩に頼んで 3 人組で出店した。百貨店の売り子は勿論、商売の経験も無く、初体験ばかりで忙しく右往左往した。幸い、休む暇も無く売れて、失敗を反省する余裕も無く、やきもの屋のスタートになった。翌年からは一人になり、百貨店の社員食堂などの裏舞台と女性の職場を体験した。1 年後には近鉄百貨店から声が掛かり、近鉄京都店にも出店した。間もなく京都店が閉鎖され、草津近鉄にお世話になった。

この頃に泉涌寺の陶芸作家の方から「絵の具には有害なものもある」と聞かされた。気になって調べたら有害な金属類が使用されているものがあった。人体に有害か否かは解らないが、化学屋の良心で怪しきものは極力使用せずに土の色で表現出来る象嵌に鞍替えした。今井政之さんの作品をトレースして象嵌に没頭していた。そんな時に先生から公募展に応募してみてはと勧められ、応募用紙を取り寄せた。名前と住所を書いて、次に所

属団体は、団体での経歴は、先生は誰ですか、これまでの実績は、ここまで見て応募を諦めた。

ある日、先生に平板への象嵌の作り方を聞いたら、平に削るのが難しく困難とのことであった。教室の先輩にも聞いたら、いろいろな失敗談を聞かせて貰って、結局「無理です」であった。出来ないと聞いたら「やってみよう」と意欲が湧くのは研究者の習性で毎日苦闘の始まりである。

5年の歳月が過ぎて、従来の象嵌とは逆転の発想で軟らかい平板の胎土に絵模様に乗った薄いたタラを載せて押し込む方法を確立した。金属や木などの硬い物の象嵌とは異なり軟らかい土でしか出来ない象嵌方法である。新しい技法であり、ネーミングをいろいろ考えたが「切り絵象嵌」になった。最初は無視されていたようであるが、今ではネットで切り絵象嵌を検索することが出来る。特許や実用新案の話もあったが、権利を確保するより広く普及する道を選び、今も陶芸教室や各種催しで教えて普及に努めている。

1997年に我が家を二世帯住宅に建て替えることになり、庭の陶芸小屋を移転せざるを得なくなって困っていた時に町議員と一緒に立派な紳士が突然来られて宇治笠取に空地があるので使っても良いとのことで早速移転した。この紳士が元宇治



工房風景 宇治市笠取の正慶窯

市長の田川さんで、西光寺の笠嶋住職など多くの人を紹介頂いた。田川さん宅には度々訪れて笠嶋住職の法話を聞かせて貰ったり、老人会の方々にパソコンを教えたり、親しくして頂いた。

笠取の現工房に移転したのは2002年になってからである。山裾の小さな庵で、住む人も無く背丈を超える雑草と蔦に覆われた自然豊かな場所である。草刈り機を購入して開拓作業をしていると、石段や小さな池などがあり、小型の薪窯が見つかり、今年に1回ボランティアを集めて焚いている。

2004年に友達に誘われてアートイン長浜に参加した。切り絵象嵌は大変珍しい作品との事で主催者の方が聞きに来られ、懇切丁寧に説明をしたが、「大変良く分かりました。でも出来るとは思いません。」とのことであった。

2006年に工房で初めての個展を開いた。公共の交通機関が無く、車しか来られない山里で、20人位の来場を想定していたが、運良く京都新聞が取材に見えてこの記事のお陰で100人を超える人が来られ、狭い工房がごった返した。この個展が縁で向いの宇治市野外活動センター「アクトパル宇治」の陶芸講師をすることになった。更に、工房の近所に泉陶料さんの工場が出来て容易に土が手に入り、大助かりになった。泉陶料の社長さんとも懇意になり、アマコン大賞の応募も勧めて頂いた。アマコンは一度も入賞すること無く終わったが、孫が初めて作った切り絵象嵌のお皿が小学生部門で京都新聞社賞を頂いた。城陽市のコンテストにも応募し、搬入した時に会場手伝いの学生さん達が凄い作品が来たと集まって話題になったが、見事に落選した。絵画部門で審査されたとの事である。2007年には癌の摘出手術をしたので、これを機会に百貨店への出店を全てお断りすることとなった。

2009年に第2回の工房個展を開催した。この時も地元ローカル紙に記事を掲載して頂いた。この記事を見て八幡市の流れ橋交流プラザ「四季彩館」から展示会開催の要請があり初めて工房以外での個展となった。これから3年間無料で作品展を開催させて貰った。

この頃に地元の久御山町サークル活動の一環である陶遊会から講師の要請があり、引き受けた。この陶遊会メンバーに京都市内のギャラリー「象

鯨」の親戚の方が居られ、個展の開催を勧められた。未熟で自信が無く、1年余りお断りしていたが熱心にお誘い頂き、妹に相談したら一緒にしようとして後押しをしてくれて、2011年春にギャラリー「象鯨」で本格的な個展を開いた。毎年続けて今年4回目を終えたところである。

象鯨の第1回展の際に、以前に女房と妹がニット展を開催した滋賀県比良のギャラリーのオーナーを通じて、朝日新聞滋賀支局の方（いまだに面識がない）から東京で個展をしないかと打診があった。東京は知人も少なく無名の作家が展覧会を開いても誰も来ないのでお断りした。

翌2012年2月に東京日本橋のギャラリー「遊」のオーナー夫妻が僕のホームページをご覧になって雪の残る宇治西笠取の工房に車でお越しになった。狭いポロチョイ小屋で恐縮したが、切り絵象嵌作品を高く評価して頂き、ギャラリーの企画展として開きたいとの熱意にお断りする理由もなく、同意した。2012年11月に個展を開催して頂いた。初日は予想通り僕の先輩が二人見えただけだった。元朝日新聞記者のオーナーと元朝日新聞のコラムを担当していた先輩の昔話が弾んだ。翌日のお客さんの話では「切り絵象嵌陶展」のDMが何の展覧会か解らず、紙の切絵と金属の象嵌とやきものと写真の絵が個々に展示されていると思ったそうである。それが一つの作品に凝集されていた事が珍しく、新しい事への興味は旺盛で、評判は上々であった。数々の肩書をお持ちの著名な書家の古川さん夫妻がお見えになり、大変気になってその場で産経新聞に取材の連絡をして頂いた。最終日に産経新聞が取材に見えたが明日の新聞では展示会には間に合わないののでブログに載せて貰う事になった。後日このブログが world peace art exhibition 2013 in KIEV（ウクライナ）への出展に繋がった。

昨年も東京「遊」での個展は続けた。京都・やきもの倶楽部の阿部さんが平面では無く立体作品の切り絵象嵌が見たいとのことで水引きした円筒花器に白樺を象嵌した。初めて手作業で悪戦苦闘して仕上げた。しかし阿部さんが来られるまでに江戸千家のお茶のお師匠さんが柄も形（少し変形）も気に入って水指に買って行かれた。後に漆の蓋を誂えて重宝していますと連絡があり、更に桐の箱が届き、箱書きをお願いしますには驚いた。無



東京 第2回「遊 個展」会場風景

事書き終えて記憶に残る一品になった。

今年5月の京都ギャラリー象鯨での第4回切り絵象嵌展は初めての来場者が増えて雰囲気が変わってきた感じがした。第1回は東日本大震災の後であり、漸く京都にも観光客が戻って来たのでしよう。特に外人の客が毎日数人見えた。残念ながら言葉が通じず接客はギブアップであった。でも一人だけ五十三次の絵を買って頂いた。来年も続けるなら英語が必要と痛感した。嬉しいお客さんもあった。鳥取から見えた若い女性が「世界に羽ばたくかも知れない作家の展覧会があるから観て来なさい、と言われて来ました。」と熱心に鑑賞して頂いた。

今年は、やきもの倶楽部の運営委員を引き受けました。また、8月には「日本藝術の創跡」（芸



写真集「日本藝術の創跡」に掲載された作品「京都・東寺」

術写真集)に現在のパイオニアとして掲載頂いた。さらに、アメリカの **worldwide art promotion** によるアメリカでの販売開始の話も出ていますが、未知数です。

「あるがまま、なるがまま」を信条にしていますが、多くの人に助けられ、活動範囲も自分の想定とは異なる成り行きに戸惑いを感じています。残り少ない人生ですが、体力と気力と資力が続く間は皆と一緒にやきものを楽しみたいと思っています。

私の作品自慢

創作の道しるべ

会員 寺西 健二

私と陶芸との関わりは、平成10年に私より一足早く妻が陶芸に関心を持ち、地域の陶芸サークルに入会したことに始まります。当時、私は陶芸にまったく関心は無く、職場のサッカーチームに入りグラウンドを駆け回ったり、夏はテニスや琵琶湖でヨットや水上バイクでウェイクボード、冬はスキーというようにアウトドア専門で、生まれてこれまで文化的なものとの関わりはほとんどなかったのです。それが、妻に誘われるまま、ひと月に2回の陶芸サークルで、しぶしぶ陶芸をやることになりました。

陶芸を始めて1年後の秋に、大津市の瀬田にある滋賀県立近代美術館付近を妻と散策していると美術館の裏口で、何やら大きな絵画や陶芸の作品を持ち込んでいるのが目に入り、聞いてみると公募展である滋賀県美術展覧会の作品搬入だとのこと。私は突然何を思ってその気になったのか忘れましたが、応募用紙をもらい、家にある作品に応募しました。その結果、ビギナーズブラックというもので、入選となり美術館に展示してもらいました。自分の作品と名前が多くの人目に触れると

いう、少し自慢げな気持ちを味わうこととなり、これが陶芸にのめり込む大きな一歩となってしまいました。暫らくたってから、書店で目にする美術誌の方から「寺西先生、私どもの本に掲載されませんか」と電話でのお誘いです。「先生」と呼ばれてこれまた有頂天。送ってきた資料を見ると掲載代がかかると知り、これは自費出版のようなものだと思います、いずれ実力がつけば相手から掲載の謝礼がいただけるんだろうと、とんでもない思い違いをしたまま、丁重にお断りをしました。それから以後、出版社からのお誘いは皆無です。

入選した「土彩」という作品は、いろいろな粘土を紐作りで重ねて成形し、電気窯で焼成したものです。土の彩(いろどり)を感じることができ、収縮率の違いから焼きあがった作品は、表面がでこぼこした感じとなっています。



「土彩」 幅 55×奥 15×高 35 (cm)

私が「京都・やきもの倶楽部」の会員になったきっかけは、平成20年にホテルグランヴィアでの設立総会の様子が京都新聞に「器と食のコラボ」という記事で掲載されたことでした。この倶楽部なら、食に興味のある妻とも一緒に参加できると思い、会員申込みをしました。ここでは、自分の作品を清水焼の作家から講評を受けるという企画があり、先生方から褒められたり、適度にけなされたりでした。普段から創作の意欲を保ち続けるのは難しく、このような講評会などで適度な刺激を受けることも必要だと感じました。

そのような思いの中、森田先生に作品を見ていただく機会があり、いくつかの作品を見ていただくことができました。先生は、私の作品をひとつお見ると、「あなたはA型の公務員ですか？」

と尋ねられました。大当たりです。私は「ドキッ」とし、先生は占いの大家でもあるのかなあ、さすが作家は多芸やなあ…… と思い、その理由を尋ねてみると、占いでは無く、作品からくるイメージを言葉で表した結果でした。そのイメージとは、「作品をキッチリ作り過ぎ!」「形が安定し過ぎ!」との講評です。次に、そこでいただいたアドバイスは、「作品の口は個性を表現したり、作品全体の出来栄えを決めるポイントとなり、極めて重要です。」「作品には、安定の中の不安定さも、動きとか面白さを出すのに重要です。」他にいくつかアドバイスをいただきましたが、それを控えた紙をなくしてしまいました。今でも記憶に残り、いつも心がけているのは、この二つだけであり、私の創作活動での道しるべとなっています。

その後、この道しるべを心掛けて作った「湖峰」という作品が、昨年の公募展である京展に入選しました。この作品は、古信楽の粘土で成形し、その後、生乾きの状態で、黒い粘土と古信楽粘土の配合を変えた数種類の粘土を貼り付けていき、電気窯で焼成したものです。



「湖峰」 幅 70×奥 45×高 30 (cm)

私は公募展に気楽に応募したりして楽しんでいますが、プロの陶芸家は作品づくりに大変な思いで取り組んでおられると思います。陶芸のプロでない私は、陶芸を楽しむことができます。楽しむことにアマである価値のひとつがあるように思います。私は陶芸に関わるいくつかの集まりに入っていますが、陶への想いをきっかけとして出会った人達との結び付きにより、今後の人生を楽しく豊かに、ボチボチ過ごしていきたいと思っています。

最後に、創作への道しるべを示してくださった

森田先生に感謝を申し上げ、また普段よく遊んでくれる愉快的な陶芸仲間にも感謝を述べたいと思います。

陶芸技術ノート

粘土板で立体を作る

— タタラ造り —

陶芸家 森田 隆司

タタラ（粘土を一定の厚みに伸ばした板）と云う言葉、焼き物に携わっている方なら何の疑問もなく使っている言葉だと思いますが、改めてパソコンで調べてみました。タタラ……製鉄をする時に使う鞆（ふいご）という風を送る装置の踏み板のこと。やはり板に繋がる説明が多くありました。

タタラ造りの利点は、面・エッジが綺麗に仕上がることだと思います。今回は高さ 55 cm、幅 20 cm の四角柱を作る手順を掲載いたします。設計図、展開図を描いて、各パーツの寸法をしっかりと計算しておく事が大切です。板と板を張り合わせる方法によっては、板の厚み分を足したり引いたりしなくてはなりません。

手順1 土の荒延ばし



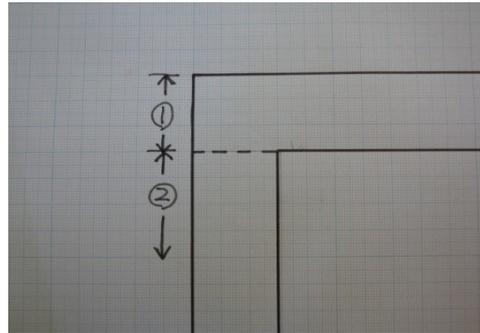
手で土を延ばし、各パーツになるタタラを作ります。

手順2 延ばし棒を使う



この作品は厚み 14 mm。土の表裏を延ばし棒で厚さにむらのないように延ばします。この作業を怠ると歪、変形の原因になります。

方法2



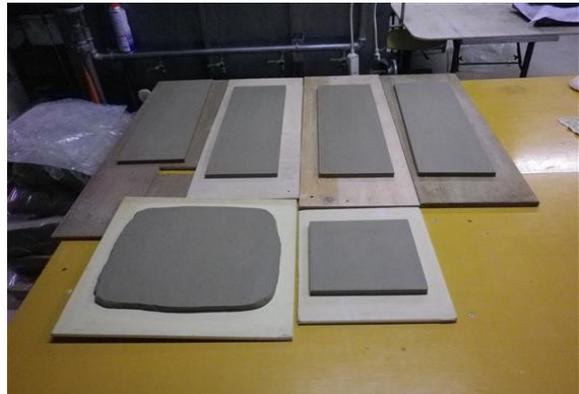
破線の部分で接着すると①と②の土の締りが違うので、焼き上がると段になって出てきます。目立たなくするには、化粧・櫛目等の表面処理をすれば多少おさまります。

手順3 寸法取り



各パーツを貼り合わせるの寸法を正確に。これを間違えると組上げる時につじつまが合わなくなります。キレイにした面は出来るだけ触らないように。

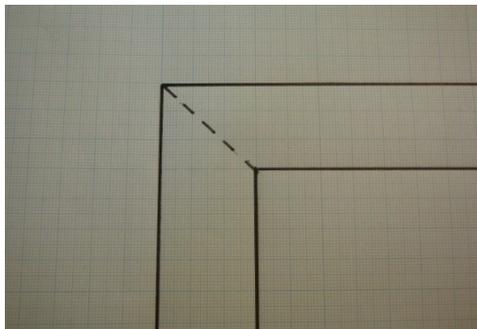
手順5 カットしたパーツの乾燥



タタラは一日陰干しにして、やや硬く（そっと持ち上げても曲がらない硬さ）します。

手順4 タタラの貼り合せ方法

方法1



タタラの貼り合わせる面を 45° にカットし、破線の部分で接着するのが理想的です。

手順6 糊代にドベを塗る



接着部分にクシでキズをつけ、ドベ（粘土を泥状にしたもので、接着剤になる。私はそれに少し石灰釉を混ぜます。）をはみ出してもいい位たっぷりと塗ります。

手順7 側面（1枚目）の接着



各パーツの表面にキズをつけない様、ベニヤ板ごと持ち上げてズレが無いを確認しながら接着します。

手順8 接着部の補強



接着部内側に補強のためのヨリ（土をヒモ状にした物）を圧接します。

手順9 側面（2枚目）の接着



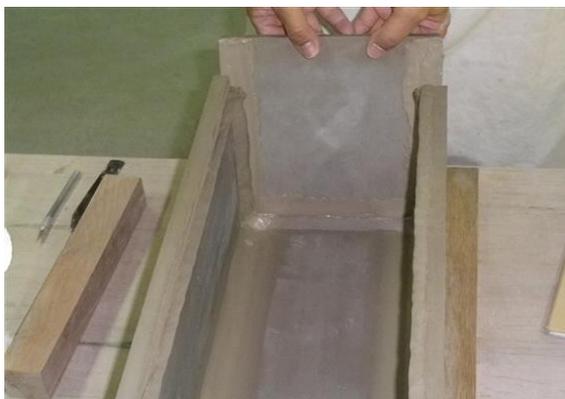
これもベニヤ板ごと持ち上げて接着します。

手順10 接着部のズレ検査



接着部に板を当て、ズレがないかを確認し、あれば修正します。

手順11 底面の接着



作品の底になるパーツを接着します。

手順12 最後の側面の接着



最後に接着するタタラは、寝かしたまま接着すると重みでたわんでくるので、本体を立ち

上げます。予め内側に補強の為のヨリモ付けておきます。後からだ大きな作品では底に手が届きません。

手順 13 上面の接着

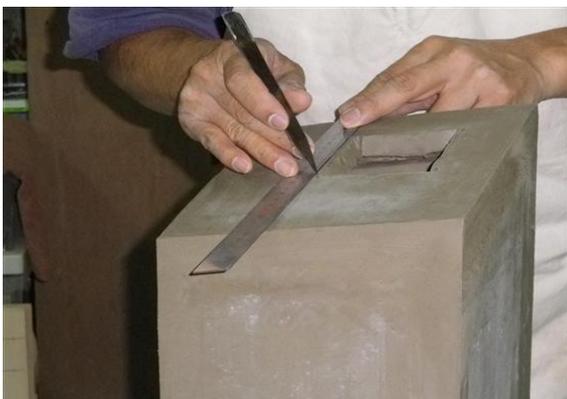


底、側面が組みあがり上面を接着する作業に掛かります。側面の面積を広げれば、中からボール状の物で叩き出し、少し面を膨らんだ形にしておきます。焼き上がった時に痩せて見えるのを防ぐためです。



上面になるタタラの接着。エッジを鋭く削り出すのに私は金切ノコを使っています。

手順 14 口を作る



口になる部分をかんなでカットします。

手順 15 面とエッジの仕上げ

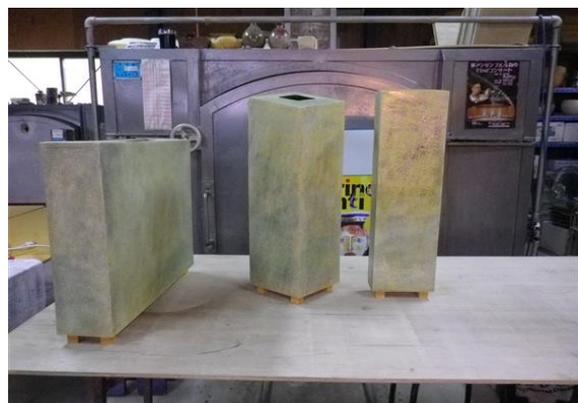


一日乾燥させてから、面とエッジの仕上げをします。乾燥を急ぐと歪んだり接着部分が切れてきたりしやすいので、ゆっくり時間をかけて乾燥させます。

以上、タタラ造りの手順と各工程における注意点を挙げてきましたが、これが絶対ではありません。皆様のなかにはもっと簡単に確実に作り上げる技の持ち主がいらっしゃるかも知れません。そういう技の持ち主の会員の方、是非とも会報「炎」にご投稿ください。

文章の中にタタラ以外にも陶芸独特の専門用語が出てまいりました。また産地によっても変わることもあります。陶芸専門用語集的な物を作るのも面白いかもしれません。

最後に、ここに示した手順で作り、焼き上げた作品のいくつかを載せておきます。



「霧雨」 極細クシ目・黄緑釉・金・銀彩

展覧会見聞録

ケルンでの展覧会を終えて

陶芸家 今井 眞正

京都市とドイツのケルン市が友好姉妹都市契約を結んで、昨年 50 周年を迎えました。京都でもこの機会を記念に、さまざまな文化交流を企画し、私たちもその一つとして作品展を企画いたしました。今回は、この時の模様をレポートさせて頂きたいと思います。

ケルンはドイツの西部に位置し、ベルギーやリヒテンシュタインに近いところにある町です。車で1時間程度走ると、ベルギーに行けます。現地の方の話では、若い方は買い物も少し安いベルギーまで足を伸ばしてくるそうです。私も展覧会の合間をみて家族とともに、レンタカーを借りてブリュッセルやブルージュを旅してきました。皆さんもご存知の通り、ドイツではアウトバーンと呼ばれる高速道路網が発達しております。いまだに速度無制限のところも多く、大部分の車の流れは130キロから150キロ程度ですが、中には200キロ以上も出しているであろう車がさっと抜いていきます。それでも、マナーが非常に行き届いているため、速い車も遅い車？も行儀良く車線を使うので、気持ちよくドライブすることができました。「日本の道路も制限速度が無くなるといいのになぁ〜」と密かに思っております。こんな状況ですので、距離の感覚が日本とは明らかに違いますし、距離が遠くても近く感じるのには納得がいきますが、……やはり遠いものは遠いです。

話を元に戻しますと、ケルンはドイツ西部の中心の町で、その成り立ちはローマ帝国の時代から始まり、ライン川の海運の拠点として発達したそうです。海から入ってくる大型の船の荷物をこの町ですべて小型の船に積み替えて、南部のフランクフルトやミュンヘンあたりに運んでいたそうです。すべての荷物を一度おろし、ストックする町が繁盛しないわけがありませんね。

莫大な予算がかかったであろうあのケルン大聖

堂も、民間の力で企画され、資金難や領主の考え方の違いなど紆余曲折を経ながらも600年の年月をかけて完成させたのは、ケルン人の心意気というものでしょうか。

石の部材であれだけ大きなものを作ろうとする企画だけでも、今考えても、途方もないことだと思います。中に入ってみても、ゾクッとするようなその天井の高さと、石が組んであるだけだという何とも言えない不安感に、いろんな意味で圧倒されました。

このケルン大聖堂が第2次大戦の戦火を免れて、現代に残っているのはよかったと感じる一方、その残った理由が爆撃機からの目標として必要であったという事を聞くと、複雑な思いになります。何はともあれ、残ったということは喜ばなくてはなりません。攻撃の目印であった大聖堂以外の街の中心部は、アメリカ軍によって大半が破壊され、戦後新しく作られた街はどこか日本とも似通った雰囲気を感じる町になっています。一方、攻撃を受けなかった隣のベルギー等では、いまだに古い街並みが残っていることを思うと、非常に残念な気がします。



近くからでは写真に入りきれないほど巨大なケルン大聖堂

展覧会は、手工業会議所の全面的な協力で、会館の1階のギャラリー部分300平方メートルを会場としてお借りして、開催させて頂きました。

マイスターの国であるドイツは、手工業が非常に大切にされ、商工会議所と並んで手工業会議所が大きな規模で存在しているそうです。今回は、この団体が、姉妹都市提携50周年の記念事業として、同じ手工業である清水焼に焦点を絞り、会場の提供から広報まですべてにわたってご協力下さいました。会場は旧市内の中心部で、ケルン中央駅から大聖堂を通り、歩いて15分ぐらいのホイマルクトという大きな広場に面したところがあり、広場の回りはいろいろな飲食店やカフェが立ち並ぶ賑やかなところです。夕方になると、いろいろな人たちがこの広場に集まってきてオープンカフェでビールを片手に夜遅くまで活気があり、ご多分にもれず私もこのあたりで毎晩ドイツのビールを楽しませてもらいました。

公式な姉妹都市提携50周年の式典は、市庁舎で盛大に取り行われました。雅楽の演奏に始まり、今後のさらなる友好関係に向けた調印が両市長によって行われました。また京都大学とケルン大学の共同研究の調印なども行われ、初めて海外でのこのような式典に参加させていただいた私としては、感動的で大変幸せな体験でした。



50周年記念式典での調印の様子

展覧会の開会式には、ケルン市長をはじめとして行政関係者の方々や、会頭をはじめとする手工業会議所の皆さん、独日協会の皆さん、そして陶芸関係者らの多くの方々がお集まりいただきました。また、京都からは門川市長をはじめ、今回の公式訪問団の皆さん、展覧会準備のために一足早

くケルン入りした私たち10名程を含め、開会式はにぎやかに格調高く開催されました。



「京焼・用の美」展 会場の賑わい

会場には、各個人の作品2点程度と日本の祝いの膳をテーマとしたテーブルコーディネートを展示させて頂き、京都の陶芸の現状と焼き物の使い方等も含めたプレゼンテーションを行いました。ドイツの方々にはおおむね好印象をもって受け止めていただいたと考えています。



ケルン市長を挟んで加藤君（左）と私（右）

皆さんもご承知かと存じますが、もともとドイツの料理は、ほとんどOneプレートに収まっています。日本のようにお皿や鉢がいっぱい並ぶ食卓はやはり馴染みがないようです。

それも、ドイツでは、食器のほとんどが白色の無機質なものが中心で、季節の器を楽しむといった習慣はないようです。やはり、日本の習慣も含めた文化を紹介しないことには、本当の意味での日本の伝統工芸品の魅力をわかってもらえないのではないかと印象を強く受けました。

もちろん、芸術的な見地にはたてば、すでに先ん

じた考えを持っている国なので受け入れられるはずではありますが、私たちの仕事に関してはあくまでも工芸としてのプレゼンテーションが必要になってくると思います。

そのこともあって会期中「京焼・用の美」という切り口で講演会を開かせて頂きました。京焼の歴史から現在の状況まで、京都の歴史的背景など含めながら、使い方の実例など映像を交え、紹介をさせて頂きました。

皆さん大変興味深く熱心に聞いて頂き、やはり多角的に紹介しないと本当の意味での紹介にならないということを実感いたしました。



講演会「京焼・用の美」の様子。もちろん通訳を介してです。が、緊張しました。

私は海外において、展覧会に参加するということは大変大切なことだと考えています。自分の作品が海外でどのように評価されるかということ、やはり実際に持っていかないとわからないことです。今までいろいろな国で発表させて頂きましたが、そのたびごとに新しい発見や新しい考え方に触れることができました。

今後も機会があれば積極的に参加したり、企画したりして行きたいと考えています。

また、海外展においては作品を紹介すると同時に、現地の感性をしっかりと体感してくるという大切な目的があります。あてもなく街を歩いたり、美術館へ行ったりすることも楽しみなことです。今回は、あのドイツのビールと大好きなソーセージを心ゆくまで体験することが目標の一つでもありました。日本と違って、ケルンの市内に大小多

くのビール製造所があってその会社がレストランを経営しているといった形態が普通です。そこでいただく作りたてのビールが、おいしいこと、おいしいこと、いくらでも飲んでしまいます。

ケルンではケルツシュビールという生ビールを飲むのが一般的で、比較的小さいビールグラスでよく冷えた喉越しのいいさわやかなビールをグイグイやりながら、お肉中心のドイツ料理を食するのは最高です。日本ではドイツ料理を食することはあまりなく、よく知らなかったのが現状ですが、豚肉の煮込み料理など絶品でした。また6月はホワイトアスパラが旬の食材でこの料理も今まで味わったことのない美味なものでした。ドイツ料理を味わうためだけにでもまた訪れたいと思っています。



先進国首脳会議で使われたビアホール Brauerei zur Malzmuehle で、お世話になった皆さんと一緒にディナー

来年はフィレンツェでの企画を現在進めているところです。大好きな街なので大変楽しみにしておりますが、まだまだ乗り越えなければならないハードルがいっぱいあり、実現に向けて努力したいと思っています。機会があれば、皆様方もぜひツアーなどを組んでご一緒できればうれしく思います。こんどは、本場のパスタとイタリアンワインですね。

活動報告

現在、第2回京都・やきもの倶楽部作品展の準備が実行委員会において進められています。その詳細については、既に「作品展の案内状」と「出品要領」が配布されていますので、そちらをご覧ください。会報では、次号に作品展開催の様態を掲載する予定にしております。

倶楽部のホームページが平成20年の設立時の状態のままになっていましたので、運営委員会ではその更新作業に取りかかりました。これからは、内容をもっと充実させるとともに、京都・やきもの倶楽部の活動を外に向かって発信して行きたいと考えています。更新が完了しましたら、会報でも取り上げますので、ご期待下さい。

会員便り

個展・グループ展・公募展

(平成26年4月～平成26年9月)

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、機関誌「倶楽部だより」に掲載されたものをまとめています。会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるってお申し込み下さい。用紙は、「倶楽部だより」に添付されている展覧会情報掲載申込書をご利用下さい。

平成26年

- 4月20日～4月24日
第6回 日本陶芸ガラス展
上野の森 美術館 ギャラリー(東京都 台東区)
中山 愛子
- 4月29日～5月4日
第53回 日本現代工芸美術展
京都市美術館 (京都市)
森田 隆司
- 5月7日～5月13日
陶のボタン*陶の宝物
大亦みゆき EXHIBITION
パレットギャラリー (東京都 港区)
大亦 みゆき
- 5月14日～5月25日
日本新工芸展
国立新美術館 (東京都 港区)
中山 愛子 (入選)
- 5月15日～5月20日
宮崎まさのり 第4回 切り絵象嵌陶展
ギャラリー 象鯨 (京都市)
宮崎 正制
【「日本藝術の創跡」(株クオリアート、2014)に作品『東寺』が収録】
- 6月6日～6月30日
市川博一 陶展
Café & gallery Hakumokuren
(滋賀県 東近江市)
市川 博一
- 6月10日～6月15日
第63回 かたち 同人展
京都府立文化芸術会館 (京都市)
森田 隆司
- 6月12日～6月22日
市川博一 作陶展
ギャラリー 石堀小路 和田 (京都市)
市川 博一
- 6月18日～7月1日
大亦みゆき 陶の絵展
小田急百貨店 新宿店 (東京都 新宿区)
大亦 みゆき
- 6月25日～7月6日
全国公募2014 陶芸財団展
国立新美術館 (東京都港区)
中山 愛子 (入選)
- 7月1日～7月6日
第15回陶集団あすなる展
ギャラリー中井 (京都市)
根本 都男
- 7月8日～7月13日
第36回日本新工芸展 近畿展
京都市美術館 (京都市)
谷口 正典 谷口 良孝 寺池 尚孝

編集後記

- 7月8日～7月13日
そうび展 I期
木津市立中央図書館（京都府 木津川市）
稲垣 薫
- 7月26日～7月27日
塊（つちくれ）・作陶展
id Gallery（京都市）
片岡 俊彦
- 7月
吉田 貢 個展
— 自然釉・焼き締め普段使いの器 —
カフェ&ギャラリー・アール茶房
（東京都 府中市）
吉田 貢
- 9月27日～9月28日
第20回 山中陶芸教室 作品展
天理市文化センター（奈良県 天理市）
稲垣 薫

凡例

- 開催期間
- 展覧会名
- 展覧会場（開催地）
- 出品者名（入選、入賞）

本誌、「会報15号」では、すべてのコラムで原稿を集めるために“計画的”編集を宣言いたしました。お約束通り、本号ではすべてのコラムを埋めることができました。まずもって、執筆いただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

どのコラムを読ませていただいても、それぞれの著者の思いがこもっており、この京都・やきもの倶楽部の陶芸に対する幅の広さをうかがい知ることができます。現在、当倶楽部は役員、理事、会員合わせて66名の方々が所属されています。会報1号分で6名の方の原稿を頂くわけですから、丁度5年半ですべての方のご意見が聞けることとなります。その日を楽しみに編集を続けたいと思っています。その時は、すでに74歳になっていますが……。

「会報 HOMURA」と「倶楽部だより」は倶楽部内での意見交換と情報伝達を通して倶楽部としての理念を作り上げるために有効な手段となっており、次第にこの倶楽部が何を目的とし、どの方向に進んで行くのが定まりつつあるように感じられます。その中で、次にやるべきことは倶楽部の内から外への発信です。すなわち、多くの方がこの倶楽部を知り、その中味に賛同し、会に入りたいと思うような宣伝をすることです。その手段の一つはホームページを充実させ、魅力的なものにすることです。運営委員会ではホームページの編集作業に取りかかりました。色々技術的な困難もあるかと思いますが、是非とも納得のいく自前のホームページになることを願っています。

（編集委員 片岡俊彦）

[京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る](#)